

広島俳句倶楽部

令和四年二月作品集

七五三

ちどり

十二月上旬、孫の七五三祝をしました。晴着は、長女が産まれた時に母が買ってくれたものです。三歳の子にとて、着物や足袋は初めてなので、着るのも大変。着てからも窮屈そうでした。でも、神社に行つて、カメラマンに遊んでもらううちに、すっかり仲がよくなりました。家に帰ってから、晴着のまま遊んでいました。

幼子は母の晴着で七五三

白足袋を懸命に穿く女の子

冬の虹家族四人で社へと

冬空にぼつくりの鈴響くなり

祈祷されじつとしてをり龍の玉

千歳飴母にあづけて走り出す

カメラマンと公孫樹落葉で遊びをり

弟としやがんで写る七五三

七五三父に抱かれて帰りけり

暖房の部屋で晴着のまま遊び

《作品鑑賞》

暁子

娘さんご一家の寿ぎの一日を飾らない言葉で丁寧に詠まれています。その光景がしっかりと読み手に伝わり、こちらまで幸せな気持ちになります。お健やかなご成長をお祈り致します。

白足袋を懸命に穿く女の子

三歳の幼子でも今日が「はれの日」だと分っているのです。うか。懸命に足袋を穿いている姿に成長を感じています。

カメラマンと公孫樹落葉で遊びをり

良い写真を撮ろうとカメラマンは幼子の相手をしてくれています。晴着にも慣れて、色鮮やかな公孫樹落葉と遊んでいる姿が目につかひ、笑い声さえ聞こえてきそうに思えます。

暖房の部屋で晴着のまま遊び

帰宅後も晴着を着て遊んでいます。楽しかった一日を終わらせたくないからかもしれません。

木の实

あざみ

木の实図鑑によると、木の实は世界で二万種以上、国
果は約二百種とあり、興味を持ちました。近くで拾
う国果の殻斗の違いにも気づき、木の实探しを始めまし
た。秋空のもと、爽やかな風に吹かれて山の麓を歩いて
いると、思いがけず通草を見つたり、農家の方に果物
をいただいたり、農作業をしている方と話が弾むことも
あります。切株に腰掛けて野の花や小鳥に話しかけた
りもします。一句で言えば、嬉しいことです。今は、身
近な所しか歩けませんが、コロナ禍が収まり、遠出する
ことを楽しみにしています。

山裾を巡りて木の实拾ひけり

カンナ燃ゆ産土神へ向かふ道

どんぐりの墓を打ちては転がりぬ

鳥の来て嘴よりこぼす実紫

大空をぐんぐん広げ鰯雲

峠道蔓をたぐれば通草三つ

谷川の風に吹かるる奥木の实

寺に生る大きな檸檬椀ぎにけり

奥つ城は木の实時雨となりにけり

夕星に庭のおしろい花匂ふ

《作品鑑賞》

秋沙

あざみさんは、木の实に関心を持って里山を歩き、木の实
を探しながら花を眺めたり、鳥の声に耳を傾けました。そう
した中で生まれた佳句が並びました。

どんぐりの墓を打ちては転がりぬ

ご家族の命日に墓参りされていた時、どんぐりが墓に落ちて
転がった。驚く本人は、墓の中から「よくお参りしてくれ
ね、ありがとう」という声が聞こえてきたように感じられた
のであろう。

鳥の来て嘴よりこぼす実紫

暖かな昼下がり、切株に腰掛けていると、鳥が飛んで来て嘴
から実紫の实を零しながら飛び立った。あたかも鳥があざみ
さんに実紫の实をプレゼントした様に。

夕星に庭のおしろい花匂ふ

星の光があたかも月のように見える薄暗い夜、庭におしろい
花が芳香を漂わせている。夕星とおしろい花の取り合わせが
見事である。

母子もう帰つてゐる冬木かな

風や夕星一つしかと見え

戦うてまた森に入る寒鴉

雪を踏む音のしてゐる林かな

雪山を下りて人と話しけり

日輪と雪と遊べる女の子

雪降るや赤子いつしか上機嫌

星いくつ枯木の中に見つけけり

雪は降り川は潮と混じり合ふ

臘梅にしばらくぶりの客のあり

奥の間に火を入れやらぬ古火鉢

冬の星流れて山は静かなり

白菜を切る傍煮立つ湯の匂ひ

寒稽古終へて無言の着替かな

駈けて来て子の息弾むマスクかな

寒の水汲んでコーヒー淹れにけり

明星に添ふ寒月や夜の明くる

景牡丹の色の濃くなる朝日かな

大病院移転間近や日脚伸び

窓を開け立春の風入れにけり

数へ日の海に鷗を見てをりぬ

石段の正面に照る冬日かな

南天の実に昼の日のよくあたり

冬の鳥ときをり鳴いて峠越え

寒林の見渡す限り繞きをり

凍空の遠くを鳥の飛びにけり

雪原に吾が足跡のつづきたる

雪を踏む音聞きながら帰りけり

臘梅の一つの咲いて香りけり

春近し海まで見ゆる丘に立ち

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

寒雀木の天辺に来て止まる

冬ざれや木の天辺に群雀

初雪の中へ駆け出す女の子

雪の積む岸に釣舟舳ひたる

遠山の白く烟りて雪の降る

雪降つて墨絵の如くなりけり

潮入の岸の裸木夕日差す

枯葦のそよぐ中洲に入日影

百合鷗中洲に群るる夕間暮れ

風花の中洲に並ぶ川鶉かな

秋沙

並べ置く子らの写真とシクラメン

夫の墓名残の雪の積もりけり

飛び石に降つては消ゆる春の雪

傘さして牡丹の芽をさはりたり

紅梅へ朝日いつばい差しにけり

百年を経し白梅の香りたち

白梅のきれいな空に咲きにけり

桃咲いて山里の空雲のなし

春月に小川の音のしてをりぬ

犬ぶぐり跨いで通る野原かな

あざみ

一月の指揮棒内を描きたる

寒晴や土を積みたるダンブカー

寒晴や自転車籠に楽譜入れ

花束の仕上がりを待つ寒日和

先生に花束を買ふ冬青空

書出しの決まらぬ手紙冬の夕

一心に音符目で追ふ冬深し

病院に色とりどりの冬の薔薇

病院の機械のしやべる冬ぬくし

春浅し医師を待つ間の深呼吸

亜矢

朝刊を届けし雪の轍かな

剣道の勇まし雪の学び舎よ

大雲の影の通りて雪の峰

コート脱ぎ古き背広の男かな

刻むたびさくら色なる日野菜かな

学友と渡船より見て冬の瀬戸

水仙の真白を祖母に供へけり

豆打てば北斗七星輝けり

節分の鬼ぞと来たる保育園

受験子を黙せる夫と待つてをり

通り抜け禁止の札や石路の花

城山に凭るるやうに冬の虹

坂道を犬と下れる枯木山

坂道の裸木の影踏みゆける

冬木立かすかに鳥の声のして

我先と野を駆ける犬息白し

冬風の岸に釣竿並べたる

息合はす如くに鴨の潜りけり

帰り来て玄関に見る冬灯

立春や地下の酒場で子と語り

ビル街に公孫樹黄葉の映ゆるなり

風吹いて線路の脇に木の葉舞ふ

風の中に見えたる我が家かな

初霞小鳥の鳴ける藪隠す

大根を切りながら聞くオリンピック

白菜を切る手の震へ妻老いぬ

裏山に雪折の音こだませり

梅咲いて枝の強さを思ひけり

浅蜷握るズボンの尻を濡らしつ

海女の来て籠に榮螺の十もあり

綾乃

井藤希

英一

枯葭や軒に様子を掛けしまま

朝焚火急ぎの用のある人も

朝の陽にまだ息白き茶の間かな

探梅と釣りに分かれし交差点

寒戻る濃い目に淹れし朝のお茶

峠越す車もあらむ春の霜

はこべらや肩を借りたる下り坂

ひらがなの手本持ち込む春炬燵

囀に新聞団だて耳澄ます

夏蜜柑古家を解く日の迫る

時雨かな出雲の虹のすぐに消え

短日の珈琲雨の手を添へて

雪の降る庭をひととき見つめをり

林道の両脇に雪残りたる

咲き初めし梅の小枝に目白鳴く

古寺の梅に目白の来てるたる

春の雨一畑薬師の山に降る

椿咲く小道を足摺へと歩き

目覚むれば障子に春の月明り

にぎやかに目白の鳴いて春の朝

寒鯉に絶えず揺れたる松の影

寒林の暮れてよりする風の音

集落の真上に懸かり寒の月

城址へ踏む石段の冬の草

風花や船から見ゆる天守閣

荒畑に糠雨ひと日春近し

クロッカスはや朝の日の届きたる

上ミ下モに畦焼く煙峽の夕

潮騒を椿の道に聞きにけり

落椿寄せては返す汀かな

栄吉

大畑恵

暁子

冬草を踏んで畑に菜屑撒く

掘り起こす冬草の根の深きかな

冬天の丘の館に灯のともり

悴む手こすりピアノを弾く子かな

寒梅の林を抜けて川土手へ

一陣の鴨の淀みに動かざる

昼日中車の雪のしたたりぬ

夕暮の林に雪の落つる音

病む足に歩け歩けと春の風

節分草足の踏み場のなきほどに

すみれ

大鵜枯枝にふれ飛び立ちぬ

水仙に蒂目のある朝かな

山頂は春の光にあふれけり

遠回りして草萌の土手をゆく

一人づつ挨拶をして遠足子

野遊の土手を親子の走りをり

辛夷の芽杖つく人の見上げをり

梅の寺梅の頃には門開き

恋の鳥赤子を抱いて見上げたり

雲行きてやうやう見ゆる春の月

知佳子

今日の墓石の雪を払ひけり

雪搔いてデイサービスへ母送る

母が家の木小屋に春の光差す

小流れの水温みけり姉の墓

久々に家族の揃ふ蜆汁

水引で小さな内裏雛づくり

母が家へ行く道筋の桃の花

春の雪けさも積りて母の家

二日灸母の話を聞きながら

春の昼四方へ目高泳ぎけり

ちどり

湯豆腐や煮口無骨の夫と居て

泣連の穂を啄みこぼす初雀

思ひ出の中だけとなり大どんど

寒月に光つてゐたりささら波

肩に降りすぐに消えたる春の雪

手すさびの紅絹巾着に春日さす

足元に寒の戻りし古本屋

ニヶ月や上着重ねて小半日

梅咲いて椿も咲いて吾の庭

赤椿ぼとりと落ちて苔の上

まじろぎもせず夕暮の紅葉かな

秋の瀬戸水面に沿うて鷗飛び

冬の夕大きく竹の揺れにけり

風に舞ふ落葉を追うて掃いてをり

行く年を振り返りつ窓を拭く

蒸す湯気立つ鍋の傍に居て

足音にふくら雀の飛び立てり

仕事終へ船から眺む春の海

蓮華草かざして見せる女の子

廃車する車を拭いて春の昼

はつそりと水菜の札に手書き文字

ワイパーに流れるピンク梅見かな

菓子の下静かに豆撒の袋

寒椿宅配トラックの点滅

悴みて騒がしき子ら帰り道

収穫の刃物持つ指風冴ゆる

凍月やフロントガラスの通り道

寒月が動かぬ道を照らす朝

寒の雨フードの縁に触る頬

クレーンのワイヤー厳寒に揺れる

友岡崇山子

雲雀

ふじ女

鳩鳥のもぐる水輪のすぐに消え

硝子戸を流れてゆきぬ冬の雲

カーテンの隙間を漏るる雪明り

寒椿一番花の落ちにけり

寒椿白磁の壺に挿しにけり

垣越しに冬の椿の落ちにけり

臘梅に老いの二人の顔を寄せ

探梅は小さき祠のあるあたり

黄水仙ひとかたまりに咲きにけり

春の雲形を変へて山を越す

過疎の地に響きけり寒禽の声

中腰に見る藁苞の寒牡丹

瀬祭の酒粕提げて寒見舞

酒蔵の杉玉青く寒がはり

玉垣に日のよく差せる深雪かな

探梅の道それぞれに別れたり

怪我の子に母の呪文や春隣

立ち籠むる靄に香りて夜の梅

梅香る白堀に沿ひ歩きけり

いつもこの湿地に咲いて二輪草

山の辺の暮れなづみたり枇杷の花

この川に番鴨来て日の差せる

畑の土さらさら落ちて大根引く

平岡の肩に懐炉を貼りにけり

情報誌あれこれと読む炬燵かな

山頂に雪雲残る朝ぼらけ

新雪を踏んで門扉を開きけり

冬菫摘んで活けたる昼の卓

山畑を打つて鳥声近くなる

松田裕子

森口良樹

山野ウタ

往復の我が足跡の雪の道

ストーブの石油の缶の重きこと

凍結の道に靴音してゐたり

凍道の己が足音聞いてをり

この里の冬の灯りのまだらなり

牡蠣ご飯炊けば弟恋しくて

錆びし花ありて臘梅うつくしき

春待つや石見に嫁して年重ね

紀英子

濁り酒手書きの文字に惚れて買ふ

風の橋渡り来る二人かな

艶を判る窓に見えたる氷柱かな

冬ごもり煎餅布団に影落ちて

温泉の駅に待ちをり寒桜

睡蓮の根の張る甕の薄氷

新庄憲彦

陽が差して赤き実光る雪の朝

祖父の声庭から聞こえ寒の朝

寒餅を椀に入れば母思ふ

お社の石段ごとに雪残る

生垣にふはりふはりと名残り雪

遠藤さつき

寒晴のいつもと同じ道歩く

夕焼へまっすぐに飛び寒鴉

臘梅の離れてよりの香りかな

立春のジャングルジムに雀かな

木々の芽の膨らみに寄る雀かな

辻純江

続けざま手を伸ばしたる蜜柑かな

セーターの柄を同じく双子かな

鞍の庭師の指の煙草かな

戯れに合せ鏡や風邪籠

寒紅の一筆ごとに濃くなりぬ

村上理江

積もりたるベンチの雪に指をふれ

通勤の道に笹鳴聞こえたり

春の波防波堤へと寄せにけり

目白来て庭の椿の蜜を吸ふ

上島康子

そつと踏む初めの一步雪の道

寒晴の昨日の道を今日も行く

昼過ぎて積り始むる春の雪

紅梅をへびカー止め見上げたる

撫子

臘梅や酒蔵に人出入りして

幾たびも窓に見にゆく春の雪

春の雪七堂伽藍に積りけり

桑門わかこ

雪止みて歩き出す背に日の差せる

梅檀の枝に風花まつはりぬ

傾くる傘からこぼれ春の雪

熊谷ゆり子

春うらら空を眺める瘦せ男

キャンプ飯春の野菜で鍋ひとつ

阿波久

霜降ればペールをかけた世界なり

春泥に足取られてもなほ進む

かこ

黒々と富士のありけり冬夕焼

雪降るや句稿に残る赤インク

高嶋絹代

赤き実に集まつてゐる小鳥かな

外は雪目覚し時計鳴り響く

民

春浅し屋根に下弦の月懸かり

春寒の手水に雀来てゐたり

ちかこ

たまちやんと炬燵の中に声かける

欄干にうつすら雪の積りけり

みさ子

小雪舞ひ珈琲の香のしてをりぬ

帰り道靴先濡らすばたん雪

美耶

粉雪をラジオ聞きつつ眺めをり

ニ夕鈴のパンジーを玄関に置く

やす保

目覚しを枕辺に置き雪予報

髪撫でて今年も飾る雛かな

山崎桂子

令和四年一月度作品集より

知佳子 私の選んだ十句

鴨の岸歩める人と走る人	佐保光俊
天心の月より雪の降りにけり	村上正人
見下ろして紅葉に朝日差すところ	高尾ひとみ
臘梅を一枝活けて窓に置く	あざみ
知らぬ町歩いてあたり冬北斗	亜矢
玻璃戸より日の燦爛と初句会	暁子
牡蠣小屋に殻落つる音休みなし	新庄憲彦
来客の肩に風花載せて来し	すみれ
吾が上を羽ばたいてゆき寒鴉	松田裕子
仏壇の夫の微笑み去年今年	高嶋絹代

村上正人 私の選んだ十句

鶴は鳴き落葉は深き朝かな	佐保光俊
青い青い空を見てゐる冬の朝	高尾ひとみ
冬の滝木洩れ日のなか落ちにけり	秋沙
百寿なる患者いたはり大晦日	綾乃
明日までの音戸の渡し冬鷗	井藤希
雪催低く飛びゆく鳥の群	知佳子
焼酎をすすきり割つて寒の水	友岡案山子
暗闇の雪見また一人消えていく	ふじ女
鹿の来て畑に遊べる二月かな	桑門わかこ
積雪をまづは話題に奥出雲	熊谷ゆり子